

令和五年度都情研実態調査報告

都情研企画運営本部調査担当 八幡 亮

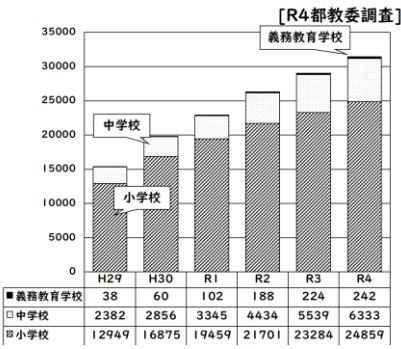
都情研実態調査結果の概要

今年度もマイクロソフトのFormsによるWebアンケートで実態調査を行いました。七月二十三日時点で回収率は、小学校特別支援教室が約八十七%、中学校特別支援教室が約六十%、小学校自閉症・情緒障害特別支援学級が約七十%、中学校自閉症・情緒障害特別支援学級が約七十二%となつたため、昨年度に引き続き、小学校特別支援教室に関する報告が主となります。

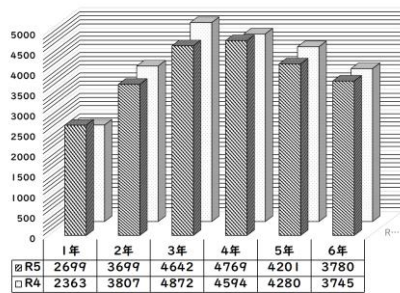
① 特別支援教室利用児童生徒数

こちらは都教委による令和四年度の調査です。昨年度の時点で小中の利用児童生徒数は三万人を超えました。

① 特別支援教室利用児童生徒数(人)



② 小学校特別支援教室利用児童数(人)

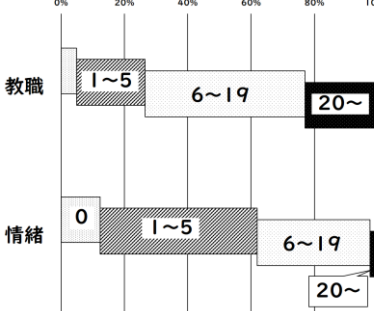


② 特別支援教室学年別児童数
三、四年生の利用児童数がピークとなる傾向は変わりません。

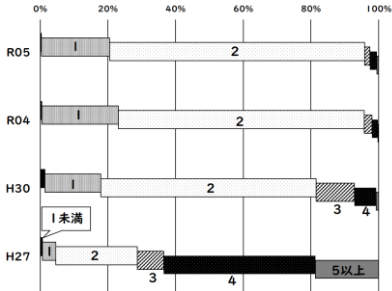
③ 教職・情緒の経験年数

情緒の経験は五年未満が六割を占めますが、教職経験では六年目以降が七割を超えているという特徴が見られます。

③ 特別支援教室(小) 経験年数の割合(教職・情緒障害)



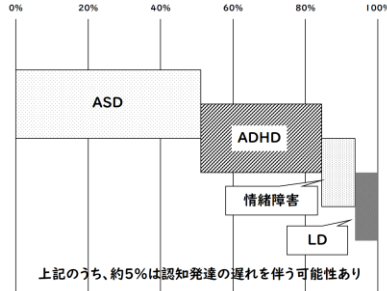
⑤ 特別支援教室(小) 児童一人あたりの週指導時間



⑤ 週指導時間数

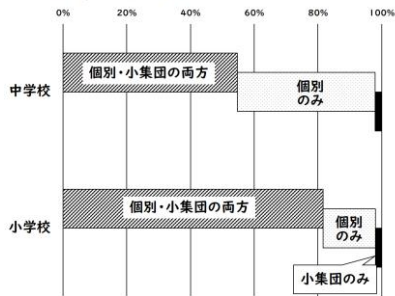
特別支援教室が導入されて以降、週二時間の指導が七割以上を占める傾向に変化はありません。

④ 特別支援教室(小) 障害種別の割合



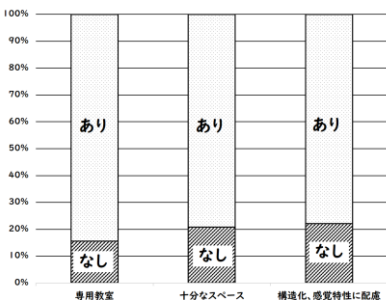
④ 児童生徒の主障害
自閉症傾向が半数を占め、ADHD傾向が三割です。また5%の児童に、認知発達の遅れを伴う可能性があることも調査で分かりました。

⑥ 特別支援教室(小中) 指導形態の割合



⑥ 指導の形態
小学校では個別と小集団の両方の指導を受けている児童が約八割という傾向が続いています。中学校では「個別のみ」が増える傾向が見られます。

⑦ 特別支援教室(小)の教室環境

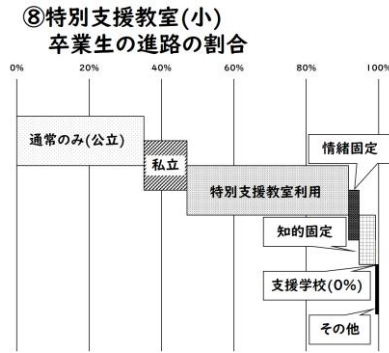


⑦ 教室環境について

全ての公立小学校に設置されている特別支援教室ですが、約二割の学校では教室環境が未だに整わない現状があると言えます。

⑧ 小学生進路先

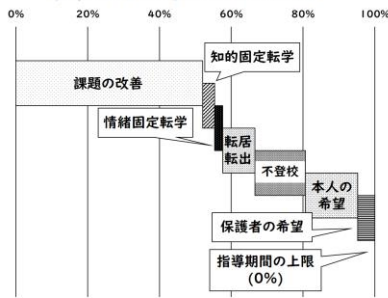
四割強が特別支援教室を継続利用していますが、三割強の児童は通級による指導を利用せずに通常の学級へ進学しています。固定学級では、情緒よりも知的への進級が多く、各自自治体の情緒固定の設置状況も影響していると考えられます。



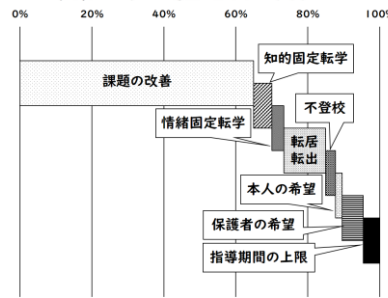
⑨ 退室理由(小・中)

小中ともに課題の改善による退室が半分以上を占めますが、中学校では不登校や本人の希望による退室が増加することが分かります。また、小学校ではわずか5%に満たない数ではありますが、「指導期間の上限」による退室のケースが見られます。今年度はガイドラインの「原則の指導期間」の延長の年となるため、今後の推移に注目していく必要があります。

⑨-2 特別支援教室(中) 卒業以外の退室理由の割合

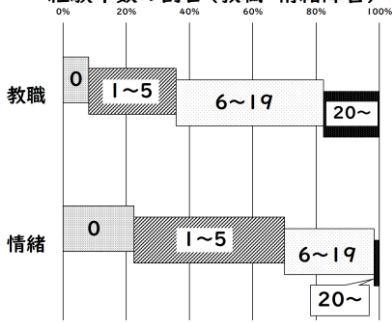


⑨-1 特別支援教室(小) 卒業以外の退室理由の割合



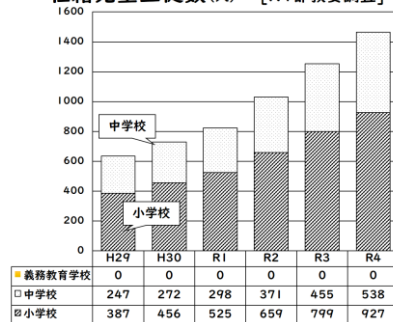
都教委が改訂したガイドラインの「原則の指導期間」の解釈の違いにより、次年度の利用継続の条件や手続きについては、自治体によってバラつきが見られています。都情研調査部として、まずは各自自治体の状況を把握し、今後の利用継続のあるべきかたちについて考える材料を揃えていきたいと考えています。

⑪ 自閉症・情緒障害特別支援学級(小・中) 経験年数の割合(教職・情緒障害)



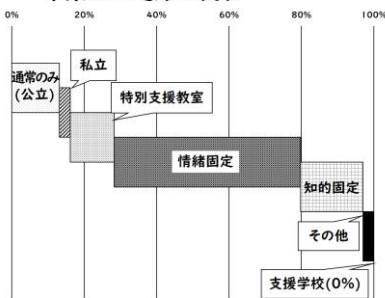
⑪ 自閉症・情緒障害学級 特別支援教室と同じように、情緒障害教育の経験と教職経験に差があることが分かります。

⑩ 自閉症・情緒障害特別支援学級 在籍児童生徒数(人) [R4都教委調査]



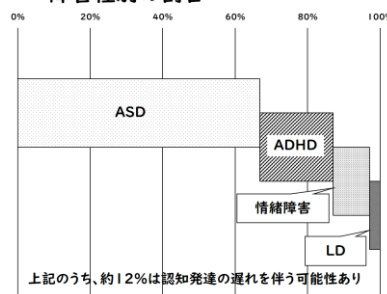
⑩ 自閉症・情緒障害特別支援学級 児童生徒数 ここからは、自閉症・情緒障害特別支援学級に関する項目です。在籍児童数の増加傾向は変わりません。情緒固定を設置する自治体は毎年度増えていて、今年度は全体の四十四%になっており、今後増加傾向は続くと思われます。

⑬ 自閉症・情緒障害特別支援学級(小) 卒業生の進路の割合



⑬ 進路先 昨年度と異なり、情緒固定への進級が五割を超え、通常の学級への進学が十三%と減りました。今後の動向が注目されます。

⑫ 自閉症・情緒障害特別支援学級(小) 障害種別の割合



⑫ 主障害の割合(小学校) 自閉症が六割以上を占め、認知発達の遅れを伴う可能性のある児童が約十二%と、昨年度と同様の傾向が見られます。

令和五年度 都情研第八回夏季研究大会

パネルディスカッション（抄録）

小集団指導における自立活動について考える

特別支援教室や自閉症・情緒障害学級で何をすべきか

【コーディネーター】

・墨田区立業平小学校

校長 伊藤 康次 先生

【パネリスト】

・区部 小学校	主任教諭	A先生（教職十二年 情緒五年）
・市部 中学校	主任教諭	B先生（教職二十年 情緒九年）
・区部 小学校	指導教諭	C先生（教職十六年 情緒七年）
・市部 小学校	主幹教諭	D先生（教職二十六年 情緒二十六年）

【進行】パネルディスカッション、コーディネーター役として進行をさせていただきます。墨田区立業平小学校の校長の伊藤でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

さて今年の夏季研究大会のパネルディスカッションのテーマは『小集団指導における自立活動について考える』です。

これまで特別支援教室に関わる指導、様々な制度改革がありました。が、やはり自立活動の指導、小集団の指導のニーズというのは、依然高いものがあります。しかも、そこに、より専門的な指導が求められているのではないのでしょうか。

そういった中で日々戸惑いながら、保護者、そして子供たちのニーズに寄り添いながら指導しているわけですね。けれどももいたい私達の使命である、この小集団指導、自立活動をどういうふうに捉えていったらよいか、その辺りを

主眼に置きながら、何か手がかりが一つでも掴めればと思っております。

本日パネリストとして四名の先生方にご登壇いただいております。まずは日頃感じていることを少しプレゼンテーションしながらご紹介いただければと思っております。【A先生】日頃の指導で感じている課題は、次の三点になります。一つ目が『在籍学級への般化』、二つ目が『担任との連携』、三つ目が『時間の捻出』です。

まず一つ目は、在籍学級への般化の難しさです。担任や保護者の要望を受けて、私達は児童の実態をアセスメントして指導を行っております。その中で特性が強いお子さんがおり、巡回指導で行っていることが、在籍学級の中で生かされないことがあります。また、クラス替えなどの環境の変化により、児童の様子が変わってしまうことがあります。指導の成果が見えづ

らく、日々の指導も手探りで行うことが多々あるので、指導法の一覧表があると良いと思います。

二つ目は、担任との連携の難しさです。在籍学級での行動観察及び個別指導の際に気づいたことを、担任に伝え、アドバイスを行っております。しかし、巡回指導教員が初任者で、担任の先生がベテランの先生などの場合は、アドバイスや助言が難しいです。また、特別支援教育の理解度や協力する姿勢により大きく変わります。また、担任の先生方もとても忙しいので、なかなか話す機会がなく、苦労するところがあります。

三つ目は、時間を捻出することの難しさです。巡回指導教員は、書類の作成、校務や会議など、やらないといけないことがあります。そのような状況の中で、時間を確保できず、指導力を向上するため研修や話し合いが後回しになってしまうことがあります。

【進行】ありがとうございます。では、続けてお願いしたいと思います。

【B先生】本市では中学校の校内通級教室拠点校が二校あり、一校あたり四校を巡回する形となっております。日頃の指導で感じている課題について、①運営面②小集団指導③個別指導の三つの面からお話していきます。

まず、運営面ですが、最初に特別支援教室での指導内容です。在

籍校での教員の中では、「通級ってどんなことを学習しているのか」そういったことの理解が難しい場合があります。先生方の中には、通級に対して興味関心や理解を示してくれる先生もいますが、そういったことが難しい先生がいるのも現状です。

次に通級時間の連絡です。通級に通ってくる時間はそれぞれの時間割で決まっています。中学校は教科担任制で学校行事等も盛んに行われているため時間割の変更が頻繁に起こっています。そのような中で時間割が急に変更した場合、変更を誰が通級の生徒に伝えるに行くのが課題になっていきます。

次に中学校から進路先高校への引き継ぎです。基本は在籍校から個別の教育支援計画・個別指導計画といった書類の引き継ぎになっています。実際に都立高校で通級の指導が始まっていますが、高校でどのような指導が行われ、何人ぐらいが利用しているのかといった具体的な内容が分かりづらい現状があります。

次に小集団指導です。設定時間や時間割の調整ですが、本校の特別支援教室では、小集団指導一時間、個別指導一時間、合計二時間の指導が基本となっております。小集団では、できることなら三つの学年をバランスよく課題や相性を考慮して、小集団を設定したいところですが、巡回校や拠点校

では時間割との調整や相談になつてくるため難しい状況があります。また生徒のグループینگや相性についても同様で、時間割の関係で組めない場合や上手くいく場合があります。

次に個別指導です。心理的な不安の強い生徒に対する指導があります。最近では、発達障害の特性と学校生活そのものに対する不安等が強い生徒が増えていきます。個別指導の振り返りで生徒と話をしていく中で、強いトラウマや強迫性、そういった精神疾患のような状況が感じられる生徒もいます。また、生徒自身のモチベーションが低い場合もあります。スケジュール管理や予定の把握、そういったものが難しい生徒の場合、通級の授業を忘れてしまうことがあります。そのような場合、誰がその在籍クラスへ呼びに行くか、どのように通級の授業とすることを伝えるか、そういったことも課題になります。また、遅刻や欠席が多く、通級の授業がなかなか実施できない生徒に対して、どのように在籍校や在籍学級と連携して、通級に来ることを促していくのが課題となっております。

【進行】ありがとうございます。では、続けていきたいと思えます。

【C先生】令和三年度に課題研究として、特別支援教室の指導体制に変わった中でどのように感じているのかを先生方を対象にアンケ

ートを実施しました。都情研の実態調査のデータに基づいてお話しします。まず、移行による「連携のしやすさ」と「連携が重要な役割になったか」という質問を行いました。その中で連携のしやすさでは、通級指導学級時代の自校通級と他校通級ともにプラスの評価が多く、連携が重要な役割になったと感じる先生が七割を超えています。巡回になったことで、声をかけるための物理的な制約や距離が少なくなりましたが、連携のしやすさは通級指導学級に比べてあるものの、その先のように連携を取ったらいのか、さらには般化に向けて担任の先生とよく相談していくところも、なかなか難しいのが現状です。

次に今回のテーマである小集団指導です。今年度の実態調査で出てきた指導形態の割合を見ますと、小学校は今八割で個別指導と小集団指導の両方が行われています。それが中学校に行くと、五割程度に下がり、個別指導のみが四割に増えていく現状が見られます。

次に指導や授業に関するアンケートです。小集団指導を充実させるのが難しくなつたと感じる先生が半数を超えています。それに関連して、指導時間と教室環境についても、十分でないと感じている先生が多くいます。平成二十七年を見てみると、週に四時間の指導が半数近くあることがわかりま

す。これは通級指導学級が、半日を小集団の中で過ごしていたという特徴があります。ただそれが特別支援教室になつてから、令和五年度を見てみると九十五％は二時間以内の指導時間になっています。通級指導学級のときには、学級内での生活も含めた小集団指導というのが行われていたように感じています。ただこの特別支援教室になつて小集団指導というのが、授業一コマ分としての授業で小集団指導という意味合いが強くなっているように感じています。

最後に今年度の教室環境の実態です。十分なスペースは得られていない、もしくは構造が感覚特性に配慮されていない教室が二割程度あることがわかります。教室環境が整わなくて小集団のような大きな活動ができない現状があると感じます。このように、小集団指導の必要性は感じつつも、こういう環境や運営の問題があり、小集団指導ができていない現状もあるのではないかと研究や調査から感じています。

【進行】ありがとうございます。では続いて、お願いいたします。

【D先生】自閉症・情緒障害学級は、通称「情緒固定」と言われ、知的に遅れない自閉症と情緒障害の児童が対象で、通常の学級と同様の学年の教科書で学習をします。一昨年の数字ですが、東京都内でも三十七の区市町村が未設置

で、昨年今年でまた増えてきています。

地域により情緒固定に通つてい

る子はかなり違います。知的に遅れがないという枠組みがあります。IQ七十からIQ百二十を超える子が同じクラスにいます。行動面の課題が大きいタイプやおとなしく不安や緊張が強いタイプ、入学時から情緒固定にいるお子さんや途中から転入の子もいます。途中から転入の子は、二次障害の様子が見られ、おとなしめのお子さんでは、不登校や教室に入れない場合もあります。色々な意味で課題がある子たちが集まってくるので、配慮が必要です。

学級編成と教員の人数配置については、知的固定の人数配置と一緒で、八人で一学級、学級数プラス一と東京都に規定があります。

人数が多く対象児が曖昧な部分もありますが、情緒固定の中で学年集団や学級集団がつかれるという良さを感じています。ただ、集団指導と個別の対応のバランスという点で、個別学習の時間が無いので、そのバランスをどうするかで悩んでいます。

他に、教科指導と自立活動のバランスがあります。六年生の教科指導を全部やりながら、自立活動をどういうふうに行うかを悩んでいます。

【進行】四名の先生方から、日ごろ感じている課題を整理していた

できました。

四名のパネリストの言葉の中で「今日指導したことが在籍の中でどういう意味をもっているのか」「つまり私達はよく一般化という言葉を使いますが、小集団指導で指導したことが、通常の学級の中でどういうふうに生かされて、どんな意味をもっているのか」という言葉が、すごく心に入りました。そこで、日頃指導していることをどういう意味付け価値付けをしながら、通常の学級の先生方と連携しているか聞いてみたいと思います。

【A先生】一般化はすごく難しいと思います。小集団指導が二学期からスタートしますが、一学期は、同じ時間に指導を受けているお子さんを集めてペア学習をしています。二人や三人で、一時間の個別指導の終わりの十分間を使い小集団指導をしています。そんな中で、例えば、なかなか相手の話を聞けなくて自分のことばかり喋ってしまふ子には、ペア学習の中で相手の話をきちんと最後まで聞こうというめあてを持たせて活動を行っています。

【進行】ありがとうございます。他の先生方がどうでしょうか。

【B先生】在籍学級への一般化で、今日やったことが明日すぐできるようなになるとか、そういった短期的な目標達成は難しいです。しかし、指導の積み重ねによる成果の例で、身辺整理が苦手な生徒が、

中学校九教科ごとに全部クリアファイルやケースに分類して身辺整理ができようになった生徒がいます。その本人の机の周りが散らかっていない状況を担任の先生も見て、通級で行っていることが無駄ではなく効果があることだという話を担任の先生から聞いています。

【進行】ありがとうございます。先ほど先生からお話があった「活動のめあて」と「個々のめあて」をどう立てていくのか、小集団指導における自立活動というテーマと関連をさせながら、在籍の先生方にお伝えしながら一般化を目指していくのか、あるいは連携を深めていくのか、その辺りで悩んでいる部分とか、あるいはこんな工夫をして私達の指導について、理解を深めたといった事例があれば、お話を聞きたいと思っています。

【C先生】担任の先生と話したいのですが、声がかげづらい先生もいるので、事前にまとめて端的に伝えなくてはと思っています。自身、指導教諭の職務として「指導教諭だより」を活用し、情報共有のツールがあるので、毎週特別支援関係のことを発信しようと思っています。

【進行】ありがとうございます。D先生お願いいたします。

【D先生】これまでの経験の中で、専門性を上げなければと思い、勉強してきたのですが、具体的に「専門性を上げるって何だろう」と思

うと、その一つは自閉症のことについて詳しくなることだと考えます。自閉症ってどういう思考で、どういう行動をとっているのかを知ることがすごく大きかった気がします。また、経験年数が浅くても、うまく連携をできる先生は、連絡ノートに「今日はトラブルなくみんなと仲良く過ごしました。」だけでなく、トラブルがあった日に、トラブルの経緯やそこでの子供自身の思い、最後まで解決したこと等、そこにちゃんと担当としての意図や意味、見取り、価値づけがあることが書かれていると、担任はすごく意味のあることをやってくれていると感じます。同様に「またやらかしたんですか！」と言っていた保護者でも、子供の見方が変わってくるんです。通常の学級の先生でも、子供や保護者とうまく対応している方々は同様にやられているように思います。この辺りがうまくできると、若手やベテランといった年齢は関係なく、良い連携が生まれるのを実際に身近で見えてきました。

【進行】ありがとうございます。今その子供たちに起きたことを、どう意味付け価値付けするかという話が出ました。伝える内容について、方法論ではなく、今のお話を聞いて感じたところがあればお話をしていただけだと思います。【A先生】我々のやっていることの意味や意義を担任も保護者も求

めていると感じました。時間がないうちで、ICTを使うのはとても良いのかなと思います。我々が個別指導の際に行った授業のめあてと成果、課題をTeamsで担任に発信し、共有する。そして、担任の先生は、日頃子供が頑張っている作品やノートなどを、写真で撮って私たちに送ってくれると我々にとってもプラスになります。【B先生】連携ですが、中学校では、放課後の時間は部活動のため、使いつらいです。そうなると先生方の時間を見つめるためには、時間割を見て空き時間を見つめる、もしくは空き時間がない場合は、始業前、朝打ち合わせの前にお願いすることもあります。あとは、専門員さんに伝えたいことをメモしたり、伝言してもらったりして、担任の先生とやり取りする方法もついています。

【進行】ありがとうございます。物理的な時間をどう解消していくかが現実的に厳しい中で、工夫できること、例えば今ICTの話が出ましたけど、他の学校では例えばICTを使って何か連携、情報連携した事例はありますか。

【C先生】校内であれば一つのファイルを同時に見て編集することも可能です。お互いに一週間の時間割の様子を書いてもらい、それを共有しながら話すことができます。そういう形のツールを使い連携することもあります。

【進行】ありがとうございます。

様々な連携ツールを使いながら、日頃私達が指導していることを通常の先生方にもお伝えしている、あるいはまた通常の先生からも日頃の子供たちの様子をいただきながら、指導に生かしていくやり取りがきつとあると思います。今後私達の指導をどう通常の学級の中に伝えていけるのか、ずっと言われていた課題の一つでもあるので、これからも研究していきたいです。

【A先生】本日の講師の長谷川安佐子先生の言葉で、個々の課題に合った経験を積ませていくことが大事ではないかと思いました。そして、それが子供の自信に繋がっていくと思えました。本人ができること、頑張れることに目を向け、そこを指導していく、支えていくっていうところが今後できることかなと思えました。

【B先生】改めて中学生という段階では、自分を理解する自己理解を深めて、自己肯定感を高めることを業して進路先高等学校へ送ることの大切さを改めて感じました。なかなか、本日の実践発表と同様のことは本校ではまだ難しい状況ですが、得た情報をまた二学期以降の指導に生かしていきたいです。

【C先生】指導の様子やどう工夫してきたのかという先生方の思いを聞くことで、やはりそれぞれの環境や制約があり、苦労しながら先生方が試行錯誤して、ど

こかで活路を見出し、「子供のためにこういう指導をやつていい」というのを改めて知ることができました。また、学校全体が今、なかなか子供と向き合えないと言われる中で、この特別支援教室もどういう体制で子供に集中して向き合えていけるのかという体制を一つこの過渡期中でつくっていく、考えていくというところもとても大切だなと思います。

【進行】ありがとうございます。最後、D先生の方からは情緒固定の様子も少し付け加えてお話していただければと思います。

【D先生】情緒固定は、自立活動を「特設した時間」と、「教育活動を全体を通して実施する」と書かれています。私は「自立活動」の特設の時間の話だけではなく、日常の中で、障害特性と、自立活動の視点を常に持ちながら生活することを大切にしています。

学習態勢という言葉が、どのくらい皆さんに馴染みがあるのか分かりますが、「着席、姿勢の保持、注視、傾聴、発話の制御、待つ、切り替える、相談できる、アドバイスを受け入れられる」とかそういった個人が「学べる身体と学べる心をつくる」ということです。これができるかという点で結局情緒固定にいった子供たちが集まっても、学べる環境にはなりません。これができると、すごく良い感じになります。あと、特別支援教室

だと「一般化は通常の学級で」となりますが、情緒固定は、もう毎日その場所なので、一般化の場所は日常と思っています。

【進行】はい、ありがとうございます。今回のそのパネルディスカッションの趣旨に基づいて、みんなでの課題を共有していくこと、それから、今回の夏季研究会のように、より多くの実践例を持ち寄りながら、みんなでの実践について考える、何かそこに一つ私達がなすべき課題があると感じました。

今日限られた時間の中で、大会も含めてこれまでの実践の中で課題提供していただきました四名のパネリストの皆様は拍手をもってお礼に変えたいと思います。どうもありがとうございます。

第八回夏季研究会を終えて (企画運営本部総務 上山雅久 立川市立第八小学校小学校)

令和五年八月三日(木)に大田区民ホール「アプリコ」大ホールにおいて、第八回夏季研究会(南ブロック大会)を開催しました。三年振りの集合研修だった前回大会を上回る計八六六名の参加者が集い、盛会となりました。今年度は、小学校特別支援教室導入から八年目、中学校特別支援教室の全校設置完了から三年目となります。また、自閉症・情緒障

害学級の施設が増えていることを踏まえ、大会テーマを「小集団指導における自立活動について考える」特別支援教室や自閉症・情緒障害学級で何をすべきか」といたしました。各ブロックの実践発表を中心に据え、指導助言者として、定期総会記念講演に引き続き、前新宿区特別支援教育相談員の長谷川安佐子先生にお越しいただきました。長年の指導経験に裏付けられた、現場感覚の指導助言をいただき、とても勉強になりました。また、パネルディスカッションでは、四名のベテラン指導者の先生に、実践を紹介いただきながら討論していただきました。一日を通して、様々な実践の様子が刺激となった、素晴らしい研究大会でした。一年前から準備を進め、奔走してくださった南ブロック本部の皆様、ありがとうございます。

編集後記

広報に関するご意見、ご感想がありましたら、左記までお寄せください。

都情研ホームページでも閲覧できます。

編集・発行

企画運営本部広報担当
各ブロック 広報係
世田谷区立船橋希望中学校
(小峰秀律)

03-3484-3743

